

大念佛

No.59
発行／融通念佛宗総本山
大念佛寺
大阪市平野区平野上町1-7-26
TEL.06-6791-0026

迎春



大原音無しの滝 良忍上人ゆかりの地



融通念佛宗管長

倍 巖 良 舜



平成二十三年（辛卯）の新春にあたり、皆様方にはよきお年を迎えられたこととお慶び申し上げます。一年の間にはいろんなできごとがあります。また、百人いれば百通りの時間があります。時間は永遠の過去より永遠の未

来へとすべてをのみこんで進んでいく不思議なものです。この物理的時間に対して、人間の心と共に動く心理的な時間があります。私達のこの世界には「物の世界」と「心の世界」があります。「物」とは辞書によりますと「形のある

物体を初めとして広く人間が知覚し思考しうる対象の一切」となっております。「心」とは「人間の体の中にあつて広く精神活動を司るものになるもの」となっております。しかし、心は身体の中にとけこんでいるのでとり出して見ることにはできません。そこで「物が分かる」「物ともせず」「物のはずみ」など、物で始まる言葉は百六十程あります。一方「心が重い」「心が晴れる」「心に残る」など、心で始まる言葉は二百四十程あります。また「物理」「物件」「物産」のように物が始めにつく語彙は四十三程あります。更に「万物」「人物」「生物」のように物があ

それに対し「一心」「小心」「仏心」等「心」があとにつく語彙は七十程あります。「心労」「心外」「心服」等、「心」がはじめにつく語彙も七十程あります。つまり我々の生活において「物」よりも「心」に重点が置かれていることがよくわかります。私達がたずさわっている宗教という分野は心の問題に関する精神科学とよばれるもので、人間精神が作り出した文化現象を理論的に研究する学問を基礎にしています。

この大事な「心」にぬくもりを与えるのが宗教の役割だと思えます。信仰を通して私たちは、心のぬくもりのある社会をつくっていかなくてはなりません。

開宗900年記念 大法要
大通上人300回御遠忌
平成27年5月1日～5月7日

初詣
大晦日除夜鐘つき法要
年末年始は本山へ
融通念佛宗
総本山 大念佛寺

葬儀を考える

融通念佛宗務総長 吉村 暲 英

私たちが肉親、同僚、友人、知人等の葬儀に参列する機会は、人により異なるとはいえ年に数回に及ぶことが普通です。送る人も送られる人でもあります。厳粛な気持ちで向かい合ひましょう。

一、地域共同性

本来、葬儀は地域ぐるみで行うべきものです。遺族は故人の傍に付き添い、弔問客の応対に専念し、通夜、葬儀、収骨、あと片付けに至るまで、食事の世話をはじめ一切の雑事、運営は手伝いの人に委ねるのです。そこに相互の深い絆があります。これが日本の葬儀の原形です。

かつては結婚式、新築、改築などの慶事も同様でした。人びとは人生の大きな節目には皆で共に喜び、共に悲しむという姿がありました。人はひとりでは生きられない。お互いが支えあってこそ生きていけるという具体例が、そこにはつきり読み取れます。葬儀に限ってみると、いとしい肉親を亡くした悲しみは、周囲の人びとの温かい慰めと励ましによってどれほど軽減されることでしょう。

しかし今、地域共同体としての性格は急速に失われつつあります。それが人間関係の上に悪影響を及ぼし、孤独死、自殺者の増加、はては諸の犯罪にまで発展していることを憂うべきでしょう。



葬儀とは死者を葬むる儀式のことですが、単に固有のいのちが喪われ、その遺体を処理するというものではありません。地域社会と自己の持ち場の中で、多くの人とかわりを持って生きてきた人の死を、社会的に告知し、ともに悼むということは、葬儀において大切な意味を含んでいます。

二、宗教性

いのちの終焉という厳粛な事態に臨んで、神仏の前でいのちの行方と来世の幸せを念じることが、葬儀の最も重要な点であります。これなくして葬儀はありえないのです。

これは仏教、神道、キリスト教いずれの葬儀においても同じです。

太古以来、洋の東西を問わず、葬儀は必然的に宗教儀礼を伴っているのです。これによって故人の神を安住の世界に送ることができるようです。



近年、直送という語を耳にするようになりました。これは葬儀をせず、言い換えれば宗教儀礼を行わずに、直接、遺体を火葬するというものです。またお別れ会、偲ぶ会という言葉もよく聞かれます。これは死亡直後に近親者のみで宗教儀礼による密葬を行い、その後、一定の期間をおいて友人、知人が集まりお別れ会を開くことをいいます。しかし中には、宗教儀礼をせずに、お別れ会のみというのもあります。これは故人の神を路頭に晒すことになってしまい、甚だ恐しいことといわなければなりません。

葬儀は遺体処理という一面を持つことは確かですが、人間の尊厳性を考えると、単に一個の物体として遺体を簡単に処理することは到底できないものです。いのちは尊いといっておきながら、いのちの尊厳性を無視したこのような風潮が蔓延することは、人間そのものの否定でもあります。

仏教の唯識説では、個人生存の根本をアラヤ識といっている。死によって、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が滅しても、アラヤ識は亡びるものでないと説きます。アラヤ識とは、霊魂、精霊と考えてもいいと思います。人間の根本にある、その人をその人たらしめている

いる本来の人間性でもいいましようか。アラヤ識は抽象的な存在ですが、それを敢えて現象面で捉えると、DNA（遺伝子）などもその一つと考えていいでしょう。

三、人生の帰着

仏教では無常観を説き、念死といつて、人生に死は避けることができないということを、平素から念頭に置くことを教えます。それによって「今」を大切に生きることができるのです。

人は仕事に疲れても、帰り着く家が待っています。楽しい旅行も、帰り着くわが家があるからこそです。それではどうでしょうか。人生の最期、あなたは帰り着く所をお持ちですかと聞かれたら、どう答えますか。そんなとき、「ハイ、私は仏さまのお膝下に帰らせていただきます。」「極楽のお浄土に帰らせてもらいます。」「神の恵みに満ちた光り輝やく国に帰って行きます。」と自信をもっていえるかどうかであります。この大いなる安心感は宗教の救いによらなければ得られないのです。

葬儀は、この人生の帰着を間違いないく、安楽の世界へと導くためのものであります。

仏教における葬儀の起源はお釈迦様の養母でもあった叔母の大愛道比丘尼の死に当たって、お釈迦さま自ら引導されたとの『増一阿含経』の説によるといわれますが、まことに死者を絶対安楽の境地に導くのが葬儀の本質であることを示しています。

また葬儀における仏事作法については、『大般涅槃経後分』に説かれていることを根拠にしています。このお経にはお釈迦様の死（涅槃）に際して、多くの

弟子たちが悲しみの中にも敬いと思慕の情をこめて荼毘に付し、葬送の儀を修したことが説かれています。

四、信心の啓発

仏教における葬儀は、亡き人を安楽世界に導くための重要な儀式であり、これなくして亡者の冥福はありえないのです。

よく世間で、「冥福を祈る」といいますが、冥福とは来世における幸せのことであって、直葬や葬式無用論者のように来世も信ぜず、亡き人を一個の物体としか見ない人の使うべき言葉ではありません。

また更に、厳粛のうちに執行する葬儀と中陰供養など一連の仏事は遺族の心を和らげ、悲しみの中にも大いなる心の安らぎを与えます。葬儀を一つの機縁として、自己の人生の意義をみつめ直し、信心を喚起して、この人生を一日一日有難く生き抜く智慧と勇気を授けてくれるものであります。

よく世間で、仏教は死んだ人のためにあるのではなく、今ここに生きている人のためにあるのであるということがいわれます。まことにその通りです。しかし、生と死は別々のものではなく、生死一如といわれるように、私たちは生から死を学び、死から生を学ぶことにより、生死ともに輝かしいものにするのが大切なことでもあります。



融通念佛宗の歴史



開祖 良忍上人

融通念佛は、永久五年（一一一七）に良忍上人（聖應大師、一〇七二〜一一三二）がはじめました。上人は尾州知多郡富田莊（現・愛知県東海市富木島町）に生まれ、十二歳で比叡山に登ります。二十

三歳で京都の大原に隠棲し、来迎院を建立。幼少のころより美声の持ち主と知られ、それまでの声明（お経に節をつけて唱えるもの）を統合して大原流魚山声明を確立し、日本における声明中興の祖と仰がれています。四十六歳のとき、夢枕に立った阿弥陀仏から「一人一切人 一切人一人 一行一切行 一切行一行 是名他力往生 十界一念 融通念佛 億百万遍 功德円満」とされる偈を受け、その後、鞍馬寺の多聞天に促されて市井に念仏をひろげるために出かけます。念仏を大切にされる流れは法然上人（浄土宗）、親鸞上人（浄土真宗）へも受け継がれていきました。



京都大原 来迎院

大原は、平安時代初期、慈覚大師（円仁）が中国五台山から伝えた五会念仏により声明の発祥の地となり、良忍上人が天台声明を集大成された地でもあります。大原三千院の奥に流れるのが「音無しの滝」。良忍上人が声明の練習をしていたとき、滝の音が音律に同調して消えたという逸話から、この名がつけられました。こうした



中祖 法明上人

声明は、謡曲や浄瑠璃といった邦楽の母体となり、「壬生大念仏狂言」など様々にその影響をみるることができます。



『融通念佛縁起』

名帳で結ばれた融通の和

良忍上人の系統は、数代を経てしばらくおとろえますが、民間の宗教者たちが融通念佛をひろめてまわり、各地に融通念佛の集団が生まれます。良忍上人の系統を復活させたのは、南北朝時代の法明上人（一二七九〜一三四九）です。上人は、河内国深江に生まれ、高山野山や比叡山で修行し一三二一年



再興 大通上人

に石清水八幡大士のお告げで融通念佛の教えを受け継ぎました。良忍上人の実績と融通念佛の霊験譚（不思議なエピソード）をあらわした絵巻。十四世紀ごろから版を重ねました。中央に立つて名帳（名前を記す帳面で、この名帳に名前を連ねることは、すなわち融通念佛への入衆を意味する）を記すのが良忍上人。教えの基本は、「一人の念仏がすべての人に、すべての人の念仏が一人に融通しあい、後のお礼勤めの際には堂内に響きわたる大きな声で般若心経をお勤めできるようにしました。老若男女が声を合わせてお念仏を唱える光景を目のあたりにするにつけ、私たちが気持ち新たにさせられた心地でした。

第七回教化活動の報告

第四教区

第七回教化活動「大念仏寺修行体験」を、本山にて平成二十二年七月二十四日〜二十五日にかけて無事にとり行うことができました。



サマーキャンプ大念仏寺

早いもので教化活動も七回目を迎えました。当教区では少し視

点を考えて、講演形式ではないかたちを模索し、今回の「修行体験」を企画するにいたしました。檀信徒以外の方々からも参加を募るといふ方針で臨んだこともあり、幾度となく協議を重ね、一年余を準備に費やしました。

事前に第四教区のホームページをたちあげ、また、リーフレットを作成して教区を中心に新聞の折込みとして配布し、宗旨などの解説とあわせてPRをはかりました。おかげさまで多数のご応募をいただき、小中学生を中心に、八十歳を超える方まで、四十六名の多様な顔ぶれに参集していただくことになりました。お世話できる範囲を検討した結果、人数をしばらくはこ



食時(じきじ)作法

の場をかりてお詫び申し上げます。さて、ご記憶の通り、先の夏は記録に残る猛暑でした。修行体験当日も酷暑と呼ぶに相応しい真夏日で、まさに厳しい「修行日和」となりました。



数珠繰り

プログラムは大人と子どもとに分けて組み、勤行はもちろんのこと、食時作法や数珠繰り、講義などなど盛りだくさん。せつかくの機会です。お寺のこと、本宗のことを少しでも知ってもらおうと意気込み、少し過密であったかと心配しましたが、その不安は杞憂に終わったようです。みなさん意欲的で、熱心に取り組んでいただけ

また子どもたちの元気さには目を覚ましていられそうになりましたが、幸いにも教区のなかに教職経験者が多数いたこともあって、厳しさのなかにも温かい眼差しを織り交ぜた指導のと、二日間を有意義に過ごすことができました。お寺の想を初日に



写経中

修行体験と銘打たれたイベントに参加された方々の動機は様々であったろうと推察されます。そうした一人ひとりのお気持ちにどれほど応えられたかは、はかりかねますが、「また開催して欲しい」との声が多く寄せられたことは、実行委員会としての苦労が報われたと思います。ひとりの落伍者もなく無事に修行を終えられたのも、仏天の加護はもとより、参加者のみなさんが心をひとつにして精進してくださいました。心の中を唱えられる何気ない日々のありがたさをかみしめる。そして、日常

大きな功德をもたらす」という社会的性格をもつ相互扶助の精神です。一六四九年、摂津国平野の徳田家に生まれた大通上人は一六八九年に大念仏寺住持を受け継ぎます。ときに江戸幕府は宗教政策の確立期として重要な時期を迎えていました。上人は教団の規律をただし再三にわたり江戸に赴き、宗門復興の願いを奏上します。一六八八年に裁許が下りさらに九六年には宣言を賜り、大念仏寺を僧侶の学問所である檀林と定め、規則もつけました。その後一七一六年江戸の地で入寂しました。

の何気ない小さな変化を大事にし、少しずつでも自分や世界をより善い方向にさしむけるよう努める。今後とも、そうした心持ちを下支えする場を、みなさんとご縁を結びながら築いていけることを願ってやみませ

ん。

後日、修行体験に参加してくださった親子が、はじめ

て本山の写経会にも足を運んでく

だきました。「融通念佛の輪」は、着実にその外輪をひろげつつあることを実感した次第です。これからも様々な創意工夫のもと、この教化活動が盛大かつ意義あるものとなりま

すよう願います。

(第四教区教化活動実行委員会)

末寺巡礼 ⑦
生駒郡斑鳩町の寺々
法蔵寺住職 大東良清

寂光寺

生駒郡斑鳩町法隆寺二二二二
 法隆寺・南大門より東に向かつて石畳を進んだ所に位置する。本尊阿彌陀如来像は彫眼にして来迎



寂光寺

印を結び蓮華台の上に立ち、両脇に観音・勢至の立像を伴う。この本尊は古式を伝える室町時代の作であろう。別に地藏半跏像があり、これも室町時代の様式である。この寺には在家の方が在住しているが、地藏盆などの行事も行われ、法灯が守られているのである。

正覚寺

生駒郡斑鳩町法隆寺二二一八
 中宮寺西南方に位置し、由緒は不詳である。本尊阿彌陀如来立像は金泥漆箔にして、玉眼を嵌し来迎印を結び、両脇に観音・勢至の脇侍を伴う三尊仏である。ほかに金泥漆箔の地藏立像や合掌形の菩薩像をまつる。宝前使用の鉦は西



正覚寺

村左近宗春の作にして、享保十三(一七二八)年六月、住持楚竜の時、上田氏により奉加されたものである。ほかに元禄二(一六八九)年正月十二日没の雲妙園信女の位牌もある。平成八(一九九六)年六月九日に火災にあい現在は山門を残すのみとなったが、幸いな事にその時御本尊は、浄念寺にあずけられており消失をまぬがれたのである。

安楽寺

生駒郡斑鳩町法隆寺四六七八
 法隆寺の門前町より北西に二キロばかり続く山道を登った所に「白石畑」という集落がある。自然が息づく素朴な村の信仰の礎が本寺である。本尊阿彌陀如来像は脇に薬師坐像を伴なう。かつ小身の十二神将像を付属する。十一尊仏は、裏書によれば、元禄十(一六九八)年六月一日に大通上人によって開眼された事がわかる。



安楽寺

願心寺

生駒郡斑鳩町三井
 法隆寺の北東、法輪寺と同じ三井という集落にある。伝説によると、現在の集落のある所は法輪寺の寺地であったといわれている。昭和四十(一九六五)年頃、本堂は寺兼公民館に新築され、現在の様子になった。毎年、八月に施餓鬼会が厳修される。



インターネットで大念佛寺の情報をご覧下さい。

<http://www.dainenbutsuji.com/>

大念佛寺の地図とアクセス情報

●JR大和路線平野駅から南へ歩いて5分
 ●大阪市バス平野駅筋、近鉄バス平野元町6丁目下車すぐ
 ●地下鉄谷町線平野駅①②出口から北へ歩いて8分



願心寺

大念佛寺年中行事ご案内(一月〜七月)

- ◎修正会 一月一日 午前五時
 国家安泰・五穀豊穡・万民豊樂を祈願して法要が修されます。
- ◎融通念仏会 一月十六日 午前十一時
 ご一緒にお念仏を称えましょう。
- ◎百万遍会 一月十六日 午後一時
 外陣いっぱい張りめぐらされた数珠を、お念仏の声もろともに繰り返します。管長親下から身体堅固のお加持が受けられます。
- ◎寒行 二月三日(節分) 午前八時三十分
 本山僧侶が平野の町を鉦を打ち鳴らしながら托鉢します。
 ・大般若転読 午後一時
 ・毘沙門天護摩供 午前十時
- ◎元祖聖心大師御忌法要 二月二十六日 午後一時
- ◎納骨諸霊追善法要 二月二十七日〜三月五日 午後一時
- ◎河内御回在御出光 三月二日 午前七時三十分
- ◎再興大通上人御忌法要 三月五日 午後一時
- ◎春季彼岸会 三月二十一日
- ◎写経奉納供養・筆供養 三月三十一日 午後一時三十分
- ◎万部法要 五月一日〜五日
 阿彌陀經一萬部が誦誦され、本堂の外側に橋を組んで、雅楽演奏のうちに菩薩さまがお練りをされる儀式です。
- ◎融通念仏会 五月十六日 午前十一時
- ◎百万遍会 五月十六日 午後一時
- ◎東照大権現忌 五月二十二日
- ◎河内御回在御帰院 五月二十九日 午後三時頃
- ◎中祖法明上人御忌法要 七月七日 午後一時
- ◎鳥羽忌 七月二十日
- ◎定例布教 毎月二十六日 午後一時三十分
- ◎大念佛寺仏教講座 毎月第二水曜日 午後二時〜四時三十分
- ★写経のご案内 毎月二十六日、午前九時三十分より午後三時まで、白雲閣にて写経(一巻千円)を行なっております。
- ★納骨のご案内 本堂に於いて、午前九時三十分より午後四時まで年中無休で納骨を受け付けています。宗派は問いません。
 ☎〇六―六七九一―〇二二六

謹賀新年

融通念仏宗総本山 大念佛寺

法主	倍巖	良舜
管長	吉村	暉英
宗務総長	中江	慈光
教学部長	岡田	眞澄
庶務部長	北川	全宏
財務部長		

話せば心も軽くなる 大阪仏教テレビホン相談室

仏事相談、信仰相談、その他あらゆる人生相談を十宗派の僧侶がお受けします。

水曜日：浄土宗・融通念仏宗 木曜日：浄土真宗本願寺派・真宗大谷派
 金曜日：天台宗・真言宗 月曜日：臨済宗・曹洞宗・黄蘗宗 火曜日：日蓮宗
 (月曜日〜金曜日 一月十一日〜十二月二十四日(八月休))

でんわ 〇六(六二四五)五一一〇 午後二時〜五時迄